

京大天皇事件前後

— 小畑哲雄氏に聞く —

今 西 一

はじめに

「京大天皇事件」と言っても、若い読者にはわからない人も多いだろう。1951年11月12日、関西を巡行していた昭和天皇が、京都大学を訪れ、進講を受けてようとした時、天皇を見学しようとして集まって来た学生たちと、警備の警官たちとの小競り合いが起り、学生のなかから「平和を守れ」や「京大反戦自由の歌」の大合唱が起った。

この事件は、かなり偶発的な事件であったが、直後の国会で天野貞祐文部大臣や保守派の議員が、学生たちの行動を「不敬」だと非難し、マスコミもこれに同調した。京都大学の新聞社にも、野間宏氏（作家、京大出身）らの激励文とともに、京大を「狂大」と書いた非難のハガキなどが届いている。

何ら暴力的な事件が起ってもいないのに、翌11月13日に、天野文部大臣が、この「事件」に言及し、大学当局は15日に同学会（学生自治会）を解散して、17日に同学会の委員8名を、無期停学にした。その一人が、小畑哲雄氏である。後述するように、小畑氏にいたっては、他の事件の容疑で中立売警察署に留置されていたにもかかわらず無期停学になっている。

小畑氏とは、「燎原社（京都の民主運動を語る会）」事務局の井手幸喜氏のご紹介で、2010年3月2日、お会いすることができた。お住まいの近くの京都府八幡市橋に隣接する喫茶店で、2時間以上のインタビューに答えていただいた。小畑氏の思い出は、「私の京大事件と映画「わが青春に悔いなし」(上・下)」(『燎原』第145・146号、2003年)、「回想・1951年のこと(1～3)」(同、第132～134号、2001年)、「樹々の緑を — 戦後京大学生運動私記(1

～5)」(同、第171～175号、2007・2008年)、「「沖縄に送られることを覚悟した学生」の一人」として(同、182号、2009号)などの回想文や、『占領下の原爆展』(かもがわ出版、1995年)という著書を参考にした。またインタビューの当日、「年譜《小畑哲雄の80年》」という手作りの「年譜」をいただき、大変有難かった。

京都の民主運動を語る会の機関誌『燎原』の過去の分は、現在、3枚のCD-Rになっており、売り出されている。燎原社(FAX 075-722-3823)に申し込めば、1枚2,500円で購入できる。インタビューの時には揃っておらず、コピーなどで、井手氏のお世話になった。また、本インタビューを起こすにあたって、北海道情報大学講師の天野尚樹氏に手伝っていただいた。記して感謝したい。

1 熊本中学校時代——反骨の原点

小畑氏の経歴については、インタビューを読んでもらうとわかるが、少し「年譜」や回想文によって、補足しておきたい箇所がある。1940年、世間では「皇紀2600年」の祝祭ムードのなかで、小畑少年は大阪の小学校を卒業して、職を辞した父に連れられ郷里熊本に帰り、県立熊本中学校に入学する。そこで寄宿舎生活を経験するが、「16畳の部屋に5人、上級生と同室になり、布団の上げ下ろしはもちろん、室内、廊下の拭き掃除、洗濯などさせられる。毎週きまって、最上級生の5年生による「制裁」があり、些細な理由で殴られる」。数年前には海軍兵学校に合格した4年生が鼓膜を破られ、身体検査で不合格になるという事件があって、「制裁は禁止」されるが、それは建前で、「実際は黙認されていた」。42年に「すぐ上の4年生に集団リンチ」を受け、「この事件がきっかけとなり、学校、教師、上級生に徹底して反抗するようになった」。このリンチが、小畑少年の反抗心をつくる原点となった。

また43年5月、4年生の中間考査の時、寄宿舎生による「集団カンニング」事件が起る。職員室に夜間に忍び込んで、問題の印刷原紙を盗んだり、答案

を書き直すという悪質なものであった。この事件で「処分を受けた寮生のほとんどが、その後、海軍の予科練、陸軍の幹部に志願することになった」。もちろん予科練などには、自分から志願する生徒もいたが、戦争の末期（1943年）には、海軍の「予科練」を志願せよ、という大キャンペーンが行なわれる。そして軍の方から何名出せ、と学校に言ってくるようになる。送り出す教師の方は、生きては帰れない、と知りながらカンニング事件で「貸し」のある生徒に、志願させている。ここにも小畑少年は、「聖戦」の欺瞞性を見ることになる（「年譜」）。熊本の中学校時代の体験は、彼に反骨の精神を植え付けた。

2 スト禁止体制下の京大へ

五高の卒業後、東京での産別会議東京土建一般労組のオルグ（組織者）、熊本の共産党宇城地区委員会の常任書記など特異な体験をして、1951年の春に小畑氏は京都大学に入学する。「当時の京大は「告示9号」によるスト禁止体制のもとにあった。50年10月に「告示9号」が公布されて以来、京大では学生に対する処分が連発されていた。直後の10月22日「レッドパージ粉碎抗議大会」が、「ストの決意をもって闘う」という決意を表明しただけで、提案者と大会議長の二人は停学処分を受けた。11月22日の（略）「前進座事件」では、実に40名を超える処分者が出た。以来、ストを決議する学生大会では、成立すれば、議長、提案者は即停学、さらに停学中の者が、この禁を犯せば、「放学」処分となった。東大では「退学」処分で、一定の条件のもとで「復学」が認められたが、京大の「放学」処分は文字通り大学からの追放であった」。

入学早々小畑氏は、ビラまきだけで「占領軍政策違反」として逮捕され、軍事裁判にかけられて、山科刑務所^{やましな}に投獄されていた、文学部の学生小野信爾氏（中国史家）を、大学から追放しようとする動きに反対し、学生大会の議長をかってでた。ストライキは圧倒的多数で議決され、小野氏の処分も撤回された。

さらに学内では、前川恭一氏（経済学者）らがやっていた「反戦詩グループ」に参加し、「あかしごろう」というペンネームで、陸軍の特別幹部候補生に志願させられ、北京の野戦病院で戦病死した親友をうたった「あいつはもう帰らない」を投稿している。この他にも、5月の大阪の参議院補欠選挙で立候補した共産党の川上貫一氏の応援に駆け回ったり、同学会の総務部に当選して、「総合原爆展」の宣伝責任者になっている。まさに八面六臂の活躍である（「回想・1951年のこと(1)」）。

3 総合原爆展の成功

総合原爆展とは、「1951年7月14日から10日間、京都駅前の丸物百貨店（現在の京都近鉄百貨店）を会場に開かれた京大同学会（京大の全学自治会）主催の「総合原爆展」で、その後、各地で開かれている。6月の下旬に同学会の代議員に選ばれ、さらに総務部の情報宣伝を任された小畑氏は、「走る列車に飛び乗るように」、総合原爆展の準備をしたと語っている。「作業にいきなりかかることができたのは、なんとといっても青木（宏）委員長の下宿に主要なメンバーといっしょに合宿したことがたいへん役に立ちました」とも語っている。

若者の覇気のごさと言うのか、金もなく、丸物百貨店に途中で断られるなどの障害を乗り越え、10日間で入場者3万人という大成功を納めた。全国でこの原爆展のステールを見た人は、15万人にのぼると言われている。原爆展の成功には、工学部の西山卯三助教授（当時）、医学部の天野重安助教授（同）の2人の教官の助力が大きかったが、西山氏は、次のように語っている。

戦後急激な民主化の動きがあったけれど、戦争にまけた日本人は、心の奥底に戦前・戦中、天皇制に対してもたらされていた何ともいえぬいやな人間ベツ視の卑屈感を、すぐそのままそれにとってかわったマッカーサーの占領軍支配に対して引つぎ、もちつづけていた。天皇をあからさまに批判することがタブーであったように、何か暗い、明るみを出して

はいけないことがマッカーサーのうしろに沢山あるような感じであった。ヒロシマとナガサキの惨劇もその一つであると思われていた。

突然、それが学生たちの手によって白日のもとに引きずり出されたのである。

西山氏は、占領軍のタブーに挑戦した、学生たちの勇気を絶賛している。小畑氏もまた、「私は、あのころの日本は事実上、アメリカの「戒厳令」のもとにあったのではないかと思うのです。それも戦前の日本の軍部のようなやり方ではなく、その壁にぶつからないかぎりには、その存在さえもわからないようなたいへんたくみなやり方でした」と語っている（『占領下の「原爆展」】）。

4 学園復興闘争と荒神橋事件^{こうじんばし}

京大天皇事件については、インタビューのなかでも詳細に語っているので省略するが、小畑氏は、「安保には反対だが、単独講和条約に賛成」という立場をとった、社会党の代議士水谷長三郎氏宅の襲撃事件の首謀者として警察署に留置されていたのである。それなのに同学会委員ということだけで、無期停学になっている。なんとも無茶な処分である。

その後、小畑氏は同学会の再建に動き、また1953年の学園復興闘争のなかで、いわゆる荒神橋事件に直面している。当時の全学連は、「学園復興」を大きな闘争課題とする。小畑氏は、「「学園の荒廃」とは、施設設備の問題だけではなかった。学生の健康の問題でも大きな課題を抱えていた。当時の学生の中で、「結核」を患っていたものは、一体どれぐらいいたのだろうか」と書いている。彼の「最も親しい友人、同志」であり、文学仲間であった、山崎正和氏（作家、大阪大学名誉教授）も結核で倒れていた。

また「学園の施設、設備の、戦中、戦後の荒廃も深刻であった」。大阪市大にいたっては、校舎を米軍に接収され、小学校の校舎を借りて授業をしていた。そのうえ「一つの府県にあった旧制高校、師範学校を含む旧制の各種専門学校、それらをつ一つにして発足した新制大学は、キャンパスが幾つにも分

かれていて「たこの足大学」と呼ばれていた」。このように「学園復興」の課題は、文字通り山積みであった。そこで11月の8日から12日まで京都で全日本学園復興会議が開催されることになった。

第1日目の総会は、同志社大学の明德館を使うことになっていたが、戦前の滝川事件に象徴される、京大の法経第1教室を使いたい、という声が全国の参加者から盛りあがった。「ところが、京大の当局は、他大学の学生が入ることについては、従来からも頑なに拒否しつづけていた」。強行突破の意見もでたが、同志社で無事、総会は開かれた。この時、インタビューにもでてくる、大島渚議長の「不信任決議」というのが出されたのである。また学園復興会議の前には、西日本女子大学学生大会が開かれており、「立命館大学の学生で、全学連の関西駐在の中執加藤一子さんと、京大の梯葉子さん」らも活躍していた。

ところが11月11日、全国の学生が京大の時計台前広場で、学園復興会議のために法経第1教室を使わせろという抗議集会を開いていた。その同時刻、東京から「わだつみの像」を立命館大学に運ぶ行進が、末川博総長を先頭に進められていた。この行進に参加しようとして、時計台前広場にいた学生たちが、荒神橋にさしかかった時、市警中立売署が、不法デモとして中止を命じたが、「学生は納得せず通行許可をせまり、松浦玲君を代表として出し、話し合いを求めたが」、警察は松浦氏を拉致して派出所に連行しようとしたが、松浦氏はデモの隊列に逃げ込んだ。

すると警官隊はデモ隊を包囲し、学生を警棒で突き上げて南側欄干を圧迫したため、老朽化していた欄干約13メートルがはがされ、1列から4列に至る学生13名が、約7メートル下の河原に転落した。「鴨川の水はみるみる紅色に染まっていった」。結局、重傷7名、軽傷3名の被害をだした。これが世に言う「荒神橋事件」である。

この問題は、当日の学園復興会議の統一文化祭で報告され、予定を変更して文化祭は「抗議集会」に変わった。そこで市警本部に数百名のデモが向かったが、今度はそのデモ隊に催涙ガスが投げ込まれ、3名の学生が警棒で頭を

割られるという事件までおきた。これを「市警本部前事件」とも言う。12日の午後には、7,000名にもおよぶ抗議デモ、抗議大会が行なわれ、19日には市警との会見ももたれた。

京大当局は、この事件への談話を発表しないばかりか、11月29日に、同学会中央執行委員の松浦玲氏を「放學」処分、同委員長の小野一郎氏、同副議長の荒木和夫氏、同第一副執行委員長の阪東慧氏らを「無期停學」、その他2名の学生が「譴責処分」になっている。小畑氏は、「被処分者のうち、放學となった松浦玲君、無期停學となった荒木和夫君は、同学会の代議員選挙では、「日本共産党京大細胞公認」で高位当選をはたした4人の中の2人であった。京大当局の政治的なねらいもあったのではないかと、と思われる処分であった」と語っている（「樹々の緑を」）。

その後の小畑氏は、1954年から1993年まで大阪の私立高校の教壇に立てれるが、1957年に組合が分裂し、以後、「村八分」的状況におかれる。その苦しい時代を、山崎豊子の小説の表題にならって『私の「沈まぬ太陽」』として、『年金やわた』2002年から2003年に掲載されている（後に自費出版）。1960年代の私立高校が、いかに非民主的な運営であったか、高校時代に政治的「非行」に走り、停學・退學をくり返してきた筆者には、痛いほど理解できる。また小畑氏には、1950年代の京大の「山村工作隊」などの武装闘争を描いた、『京都・1952年夏』（『対話』第4号、日本近代文学館所蔵）がある。これらの紹介は別の機会にしたい。

小畑哲雄氏インタビュー

一 生い立ち

今西：生年月日を教えてくださいませんか。

小畑：1927年7月24日、大阪市住吉区天王寺町に生まれました。

今西：お父さんはどういう方だったんですか。

小畑：父はその当時、大阪市の教育部長でした。明治の終わりに東京の高等師範を出ました。あの頃は文部省の直轄人事でしたから、高等師範を出たら小学校だといきなり校長か教頭なんですね。それでまず京都で小学校の教頭をやりました。事実上の校長代行のようなものです。そのつぎに熊本の天草中学、それから沖縄の師範学校に行って、その後神戸市で小学校の校長をしていたときに、関一がちょうど大阪に来まして、親父を視学に引っ張ったんです。視学から教育部長になった。私が生まれた明るる年まで教育部長をしていました。

今西：関一さんは大阪の名市長ですね。

小畑：その頃公立大学がではじめました。公立大学としては京都府立医大に次いで、二番目に昇格したのが大阪商科大学（現大阪市立大学）です。大阪市立高等商業から大学に昇格したのですが、親父はこれを最後の仕事と思ってやったようです。1928年に大学になりましたが、親父は教育部長をやめて、ここの事務局長になりました。杉本町（大阪市住吉区）の当時のキャンパスは、親父が関わってつくったものです。ですから、大阪の教育界にはわりと影響力がありまして、私が教師になれたのはそのおかげもあります。

今西：いやいや、そんなことないでしょう。

小畑：いや、そうなんですよ。私は札付きでしたからね。教師になれたときは、まわりがみなびっくりしていました。

今西：確かに逮捕歴もありますからね。お父さんのご出身はどちらですか。

小畑：熊本です。商大をつくった段階で熊本に帰るつもりだったんですけど、関さんに引き留められて、1940年まで商大に務めます。滝川事件（1933年）の後、初代学長の河田嗣郎さん（経済学者）が、末川博さん（民法学者、後に立命館大学総長）なんかを商大に引っ張ってきたときも事務局長をしていました。

戦前の視学のことははじめぜんぜん知らなかったんですが、後で大阪の都島工業の教師をしていたという人から、あんたのお父さんが視察にくるときは、摂政宮が来る時と同じぐらいの大騒ぎをしたもんだと聞きました。当時

大阪市の中高連をしていた帝国女子大学（現大阪国際大学）の創業者奥田政三も、あんたのお父さんにはよく怒られたと言っていました。大阪の教育界ではなかなか有名だったようです。

今西：当時の視学は、それは権力者ですよ。お父さんのお名前を教えてくださいませんか。

小畑：小畑富記です。母は節子といますが、戸籍名はヤクです。お袋の実家も小畑姓で、家は隣同士だったんです。昔の戸籍でいえば、お袋の家は士族で親父の家は平民でした。歳も9つ違いで、父の昔の日記をみると、まわりからはだいぶ反対されて、それを押し切って結婚したようです。お袋が長男を産んだのは17歳のときでした。私は8人きょうだいの7番目です。いちばん上の兄貴とは20歳ぐらい違いました。上のふたりの兄貴は、兄貴というよりおっさんという感じでした。

今西：昔はきょうだいで歳の差がずいぶん離れていることも多かったですかね。小学校はどちらに行かれましたか。

小畑：大阪の天王寺師範学校付属小学校です。いまの大阪教育大学付属天王寺小学校。同級生に四ツ谷光子さん（元衆議院議員）がいました。1年生のとき彼女の誕生日によばれて行きました。男の子は私一人でした。なぜ私一人だけだったのかずっとわからなかったんですが、何年前に平和委員会の会合に講演しに来てもらったときに訊いたら、お父さんが推薦してくれたんだと言っていました。

今西：その頃はもう軍国主義色が強くなっていましたか。

小畑：それほど強くはなかったですね。ただ、入学の前の年（1933年）から教科書が、「ススめ ススめ ヘイタイススめ」が出てくるものになっていました。また、関東軍が匪賊討伐をやっていた時期ですから、慰問袋を送ったりもしました。『少年倶楽部』には、明らかにアメリカとわかる国と戦争する小説が出ていました。ですが、小学校に入った頃は、まだ軍国主義というほど強くはなっていませんでしたね。

2年生のときに組替えがあって、担任も変わったんですが、この担任が平

沼驥一郎に心酔してしましておね。6年生までずっと担任だったのですが、この先生の影響はあったと思います。ただ、自分が軍人になるという気持ちはなかったですよ。

軍隊に入ったのも、悲壮な決意で志願したわけではありません。1943年に学徒出陣がはじまって、徴兵猶予もなくなりました。私はもともと文科に行くつもりでしたが、先輩や教師からは理科に行け、文科に行くっていうのは死ぬってことだと反対されました。熊本中学4年生のときに五高を受けたのですが、この年(1944年)に文科の定員が30人に絞られて、なかなか難しいのはわかっていました。理科の方が定員が多く、同級生もだいぶ受かりました。ですが、迷った末に、やはりおれは文科だと決めて受験しまして、みごとに落ちました。四修では難しいと思っていましたから、来年受ければいかと考えていたら、来年から入試は無しで、内申書一本で合否を決めると知らされた。内申書一本となると、ぼくは3年生の途中からものすごくグレてしまいましたからね。

今西：上級生から制裁を受けた、というのが原因ですか。

小畑：それにもものすごく反抗しましてね。とてつもないワルになってしまいました。実力考査ならば学年で1, 2番でしたが、定期試験はまるっきり勉強しない。最後の頃は試験の時間割も知らなくてね。ですから、内申書というのは期待できないのがわかっていました。内申書無しで学力考査一本なのは陸海軍しかなかったんですよ。ぼくは右の眼が近視でしたから、陸士(陸軍士官学校)や海兵(海軍兵学校)はみんなだめで。陸軍経理学校しかなかったんです。

今西：陸軍経理学校に行く人は、かなり優等生だったのでしょうか。

小畑：後でわかったのですが、陸経というのはいちばん難しかったんですよ。300人の募集に3万人の志願者があったので、2割増しで360人合格にしましたから、倍率は80倍です。でも、ぼくは学校の成績はずっと悪くて。それは戦後復員して1946年に五高に入ってもつづいて、五高からもらった成績証明ではドリから2番目でした。おれより下がいたんだ、というのでびっくり

しました。旧制高校では、成績トップというのは別に尊敬されません。ビリで落第しない、というのがいちばん難しいと言われていました。なかなかビリにはなれないものだなあ、と変な感心をしたものです。

今西：陸軍経理学校時代には勤労働員はありませんでしたか。

小畑：私は勤労働員の経験がないんですよ。もちろん、みんなで農家に行くぐらいのことはしましたが。5年生になった1944年5月に、九州の中学4～5年生が全員集められて、鹿児島県鹿屋の海軍航空基地の掩蔽壕作りに動員されました。ですが、中国からB 29が九州に来て爆撃がはじまっていて、私は寄宿舎の委員長をしていましたから、御真影の奉安殿を守る責任者になって学校に残されたんです。鹿屋に行った人たちは1カ月間奴隷のように働かされて帰ってくると、熊本中学では今度は熊本の三菱重工航空機製作所の飛行場に動員で行かされました。私は陸軍経理学校の学科試験に合格していて、合格者は免除されたので、このときも行きませんでした。私と同期扱いになる陸士61期甲は、11月1日入校だったのですが、陸経の入校は10月1日に繰り上げられました。それで結局、勤労働員は経験しなかったのです。

陸経では、午後の実科は士官学校での副隊長が指導にあたりましたが、午前中の学科はすごい先生たちがたくさん教えていました。みんなが共通して覚えているのは戒能通孝。

今西：民法学者の。

小畑：戒能先生の授業だけはみんな眠らなかつたですよ。疲れているから午前中の学科はみんな寝ているんですが、戒能先生のだけは別でした。

今西：歴史の授業はどうでしたか。

小畑：これはもう皇国史観丸出して、1時間の授業中に天照大御神を何回言うかと数えていたら、40回以上も言っていた。あの当時のわれわれでさえ果れるような皇国史観の先生でした。宮沢俊義の憲法の講義も聴きました。

今西：宮沢俊義さんは東大から来ておられたんですか。

小畑：東大や一橋の法文系の学生はもういませんでしたから、東大からは行政法の田中二郎も教えに来ていましたし、国語は有名な倉沢栄吉（後に東京

教育大教授)が教えていました。

今西：陸軍經理学校はどこにあったんですか。

小畑：東京の小平です。午後は教練もあって、分隊、小隊、中隊ごとの訓練を受けました。もっとも陸軍經理学校を出て主計将校になっても、実際は部隊を指揮する権限はありません。ですが、本土決戦の要員になるだろうという覚悟はしていました。

二 五高の学生運動と党活動

今西：それで敗戦になって熊本に帰られるわけですね。その頃、陸軍經理学校など軍関係の学校の出身者の扱いに、困ったということがあったそうですね。

小畑：1946年に第五高等学校(熊本)を受験したのですが、二次試験まで通って発表を見に行ったら、発表は無期延期ということになった。軍の学校に行っていたものは定員の1割以内に制限するという指令がGHQから出たのです。結局、軍学校の経験が1年以内の者はその制限に含まれないということになりました。亡くなった大江志乃夫(日本近代史家)は陸士の60期で1年以上いたものだから、この制限に引っかかって、五高では私の1年下になりました。

今西：大江さんは名古屋大学の経済学部で、水田洋さんのゼミに行かれたんですね。

小畑：ええ。彼は、3年生の時にある事件があって、3カ月ほど刑務所に入っていたんですよ。

今西：刑務所に入っていたんですか。軍関係の学校に行っていた人は戦後、わりと学生運動をやっていますよね。

小畑：もう一人、沖縄で弁護士をしている新里恵二君というのがいます。彼はものすごく頭のいい男だったんですが、語学ができなくて、2年続けて落第したんですよ。旧制高校は2年続けて落第すると退学になってしまいます。結局卒業できずに、司法試験を受けて沖縄に帰って弁護士になり、沖縄の歴

史の本を何冊か書いていますよ。この新里君と大江志乃夫が五高で社研をつくるんです。五高には竜南会というのがありました。各クラブの予算の配分なんかをるところです。戦後のインフレのなかで竜南会の会費を値上げせざるをえないということで、生徒大会が開かれました。そこで新里や大江が、そもそも竜南会という組織そのものがもう時代に合わなくなっている、旧制高校の生徒の家庭の経済状況という土台が変わっている、土台が変わっているのだから上部構造としての竜南会も自治会に変わるべきだ、とやったのです。これが、ぼくらが土台と上部構造ということばを聞いたはじめてのときでした。

ちょうどその頃、授業料値上げ反対闘争が起こるわけです。このとき五高は、九州の学校のなかでも過激なものになっていきます。生徒大会には校長も出てきて激励してくれました。もし自分に君たちと同じぐらいの息子がいたら、よろこんでここに参加させるというのです。この先生は1学期が終わったらどこかにとばされてしまいました。その後に校長として来たのは、戦時中に東大で学生課長をしていた人物です。この新しい校長とはしょっちゅうもめていました。戦時中にずいぶん弾圧を受けたという人から、ああいう男が戦後も日本の教育界に残っているというのは許せない、という手紙をもらいました。

今西：陸軍経理学校から五高に移られたわけですか。

小畑：陸軍経理学校がつぶれて復員して、ポツダム浪人で明るる年の1946年に入りました。1割制限はありましたけれども、軍の学校に行かなかった連中はみんな工場動員でまともに勉強なんかしていません。かえって、軍の学校に行っていた者の方が勉強していましたから、私が入ったクラスも軍関係の学校の出身者の方が圧倒的に多かったです。

今西：陸軍士官学校なんかに行く人は、もともと優秀だったのでしょうか。

小畑：それもありますね。戦後の学生運動では、戦争中の経験がバネになったというのもあったのではないのでしょうか。

戦争中は本を読ませてもらえませんでした。ぼくは小学校の時から本を読

んでいましたが、寄宿舎に入ると本を読むのは制限されました。本に飢えていました。それで、高等学校に入ると1日3冊という目標を立てて、朝学校に行くとは図書館で本を借りて、午前中4時間の授業のうちに読んで、昼からまた借りて、帰るときにもう一度借りて、というペースで読んでいましたから、授業なんかほとんど聴いていませんでした。ひたすら本に読みふけていた。まともに勉強したのはロシア語だけです。

今西：ロシア語にはなぜ興味を持たれたのですか。

小畑：やはりロシア文学に魅かれました。五高でロシア語を教えていた永島先生というのは、野間宏の小説『暗い絵』の主人公で、京大ケルン事件で布施杜生と一緒に獄死した永島孝雄の弟さんです。

今西：1948年に授業料値上げ反対闘争があるわけですね。

小畑：220円が300円になったんですよ。300円が私は払えなくて、ほんとうに困りました。ある女性から300円貸してもらいまして、それでようやく卒業できたんです。

今西：その頃の男女交際はどうでしたか。

小畑：陸軍経理学校では、外出の前の晩に週番士官から注意があるんですよ。できるだけ電車に乗るな、乗っても座るな、飲食店に入るな、映画館に入るな、最後に、女の顔を見てはならん。女は化け物だと。女の顔を見たら化かされると思え、と。小学校の1年生と2年生は共学でしたが、それ以外は男子校でしかも寄宿舎ですから、妹がいる友達というのはみんなにもてはやされました。妹のいる友達の家に泊まりに行ったりもしましたが、異性との接触はほとんどありませんでした。

今西：1948年ごろというのは共産党の運動がもりあがった時期ですよ。

小畑：五高全体で900人余りの生徒がおりましたが、最後には3ケタの入学者がありました。

今西：100人以上いたわけですか。それはすごいですね。

小畑：毎日、数人から十数人が入るという状況でした。五高の古い建物はいまも残っている赤レンガの建物でしたけれども、そこで毎日、壁新聞を墨で

書いて壁にはっていました。それに対抗してただ一人、反対するビラをはっていた男がおりました。これが、熊中の後輩で五高では同級になった高田求とって、メーデー事件（1952年）の後、労働者教育協会で哲学の本を書きました。パーキンソン病で長いことものを書けなくなってしまいました。

今西：このときは教育復興闘争としてずいぶん盛り上がったんですね。

小畑：大学管理法案反対の最初のときです。五高は九州学連のトップバッターのような存在でした。

今西：総選挙で熊本の共産党候補の斉藤幸さんの選挙運動をやられたんですね。

小畑：戦争の終わり頃に京大で結核研究会事件というのがありましたが、斉藤さんは当時農学部でこの事件に関わっておられたようです。斉藤さんは松江高校の出身ですが、この事件には松江高校の出身者が医学部以外にもかなり関わっていました。釈放された後斉藤さんは熊本に来て、戦後の労働運動や共産党運動を指導されたんです。

今西：1949年の総選挙は、共産党が35議席といういちばん躍進したときでしたね。

小畑：革命近し、9月革命、なんて言われていました。この年、五高は卒業しましたが、大学は受けませんでした。東京で就職しようと上京しましたが、飯田橋の職安は二重三重の行列ができていました。昼ぐらいいまで並んでようやく係官の前まで来ると、国警の鑑識係ならと言われて、警察と泥棒だけはいやだと断りました。都電の車掌の募集があって、都電の労働組合柳島支部の人に勧められて受けましたが、視力が足りなくて落ちました。そこで日雇労働者の組織活動をしろということで、東京土建の中で失業対策事業の労働者の組織化をやりました。葛飾区本田の職安に失業者登録をしました。しかし、組合ができる直前に当局と現場監督から圧力がかかって、社会党系の第二組合に私以外はみんなもっていかれ、挫折しました。体を壊したこともあって、熊本に帰りました。その頃大江君らは刑務所に入っていました。1949年9月のことです。

熊本に帰ると、ちょうど人が足りなくて困っていたと、共産党の常任活動に誘われます。療養のために帰って来たのには思いましたが、地区委員会で決めたことは絶対服従というのが当時のルールでしたから、明るる年まで宇城地区委員会（熊本県宇土郡、下益城郡）の常任書記を務めました。

ところが、例の50年問題で異議を申し立てたものだから、あっというまに党内闘争の渦のなかに巻き込まれていきました。私は主流派（所感派）でも国際派でもなかったんですが、この異議申し立てで国際派からも誘いの声がかかったりするようになって、東京に逃げ出しました。

今西：やはり所感派が強かったわけでしょう。

小畑：もちろんそうです。宇城地区委員会総会が7月にありました。メンバーは5人でした。このとき県委員会から、志賀義雄・宮本顕治の除名を地区委員会の名によって決議せよ、という指示があった。それで私は、これはおかしい、党規約にも違反するとやったわけです。そうしたら、おかしいと言う奴がおかしい、と言われて、それ以降まるっきり党組織からの連絡はなくなりました。

この直前にあった参議院選挙では、前年の総選挙からみると全国的には共産党は後退したわけですが、私の村（宇土郡網津村）では36票から180票近くと5倍にのびました。

今西：それはすごいですね。

小畑：海苔業者が事業税を払えずに、県地方事務所から差し押さえにあいそうになると、村の青年たちが私のところに駆け込んでくるわけです。それで私が行くと、事務所の人間は、今日は日が悪いからなんて言ってあきらめて帰る。それぐらいやったんです。たちまち警察からもマークされるようになりました。50年問題がなかったら、そのまま活動をつづけていたでしょう。

三 京大と原爆展など

今西：九州が嫌になって、それで東京に出てきたわけですね。

小畑：いやになったというのと、いられなくなったというのと両方です。東

京に出て受験勉強をしました。その頃親父は東京にいましたから、東大に行ったら親父の手のなかにしかおれない。それで第一志望を京大にしたんです。

ぼくは、臨時編入試験で1951年に京大に入りました。これは、旧制高校の卒業生で大学に進学していなかった、いわゆる白線浪人の救済措置でした。ところが、文部省も大学も、この制度のことがよくわかっていないままやってしまったので、いろいろ問題のあることがわかった。学部によっても扱いが違った。教養の単位から取り直さなければならないという学部もあれば、いきなり学部の講義を受けるところもある。学部に行っても、2年で単位がとれるのに3年間いなければだめだ、とか。3年で卒業させるなら新制の学生と同じ扱いをするべきだというのもありました。旧制の卒業生と新制の学生では奨学金の額も違いました。そこで臨時編入生の対策委員会をつくって、また学生運動にかかわりをもつようになったのです。

今西：五高を卒業しているわけですから、ほんらい教養の授業は免除されますよね。

小畑：ぼくは入学した年に停学になって、改悛の情なしということで、翌52年6月まで解除になりませんでしたから、この年も受講届を出せず、結局2年間単位をとれなかったんですよ。ですが、2年間ととれる単位を3年間ととれ、というわけで、単位の数はごくごく少なかったですから、関西学連の委員長をしながらとった単位でも十分間に合いました。

五高の同級生の多くは東大に行っていましたが、京大に入ると偶然、五高の三年生で同級だった渡辺君というのに出会いました。もともと彼は一年上級だったのですが、落第して、三年生で同じクラスになりました。五高のそのクラス文甲の2はロシア語を第二外国語にするクラスで、彼はドイツ語で語学の時間は別だったということもあり、それほど親しくしていたわけではありませんでした。ですが、京大でぼくの顔を見たら、いいところに来てくれた、と。彼は共産党に入っていたのです。それですぐにひっぱり込まれました。

今西：50年問題のときは、除名されたわけではなかったのですか。

小畑：自分から出て行ったわけですから、除名ではありません。

今西：それで、このときに京大で復党されたのですか。

小畑：そうです。それでも最初は3回か4回ぐらい復党が認められませんでした。入学後の6月には京大同学会の執行委員に選ばれて、京都駅前の丸物百貨店で原爆展の仕事もしていましたが、それでもなかなか正式には認められませんでした。やっと認められたのは10月ごろです。

今西：原爆展のときは、情宣担当の執行委員だったのですね。

小畑：まあ、走っている列車に飛び乗ったようなものです。小畑といえば、京大のなかでいつも演説しているのが印象に残っている、とよく言われました。熊本の地区委員会の頃は演説会で飯を食ってたんですよ。有料演説会というのがありましてね。なぜ人が来るかというと、右翼がつぶしに来るのです。菊旗同志会というのがあって、これが街の真ん中に宣伝カーで乗りつけて、今晚共産党の演説会がある、つぶしに行くから見に来い、と宣伝してくれるわけです。ですから、聴衆の半分は野次馬でしたけれども、そういう方たちからお金をいただいて話をしていました。金をとって演説を聞かせるだけの勉強はしていました。

今西：熊本は国粹主義、右翼が強いところですからね。

小畑：そうそう。うかうかすると、共産党の演説会の場が、君が代斉唱、東方遥拝、天皇陛下万歳、の場になってしまうんですよ。こっちもそれをやらせまいとするわけです。反共団体の結成会などがあると、こちらから乗り込んでいったものです。よく無事に帰ってこられたなと言われました。全国から反共団体が集まってきますからね。22歳の頃でしたが、そういう度胸がありました。熊本中学の寄宿舎と軍隊での経験で身についたものかもしれません。

今西：佐々友房の濟々鬢があったり、鹿児島と並んで九州の右翼運動のメッカですからね。

小畑：われわれの先輩でたいへん有名なのは谷川雁（詩人）です。ぼくらが入った頃はもういませんでしたけれども。

今西：彼がやっていたサークル村には、ぜんぜん関わりはないですか。

小畑：ぼくはぜんぜん知らない。谷川さんの名前だけはよく聞いていました。熊中、五高の先輩です。とうとう一回も顔を合わすことはありませんでした。

今西：弟さんは、京大の東洋史の教授だった谷川道雄先生です。当時、京大は原爆調査もやっていましたよね。

小畑：そうです。京大出身の軍人が第二総軍の司令部にいて、その要請を受けて戦中に広島へ行きました。戦後も、医学部と理学部の両方から調査団が行っています。枕崎台風（1945年9月）で遭難しているんです。

今西：原爆展はすごい反響があったのでしょうか。

小畑：丸物百貨店で、冷房もなにもなかった時代でしたが、2万5,000人ほど集まりました。そのほかにも大小さまざまな原爆展をつくりました。宇治市の公民館では大原爆展をやり、中小の原爆展、最後は模造紙一枚のステール原爆展まで、いろいろなパターンがありました。

今西：丸木位里さんの「原爆の図」も飾られたんですか。

小畑：ええ、とくに第5部は丸物百貨店の原爆展が本邦初公開でした。

今西：京大看護学校事件（1949年）の頃はまだ五高におられたわけですか。

小畑：ええ、ですからぜんぜん関わっていません。ぼくが入った1951年は新制高校と旧制高校の出身者が同時に入学したんです。その前の年までは別々だったのですが。新制の人間は18歳でしょう。こんなのが大学生かとびっくりしましたよ。

今西：京大は、看護学校事件の頃から学生運動が活発になっていきますよね。

小畑：京大同学会は一時期右派が強くて、全学連を脱退していたこともありましたが。その後また左派が握って全学連に復帰しました。ぼくが入った頃の京大同学会は、中央に対抗する反対派の中核でした。

今西：中央は国際派で。

小畑：京大は所感派。

今西：よくいえば主流派という言い方をしますね。

小畑：京大は当時の西の拠点でした。

今西：東京は国際派が強くて、京都は所感派が強い、というのは何故なのでしょう。宮本顕治さんの影響でしょうか。

小畑：東京は、やはり宮本顕治の影響が強かったのだと思います。京都は、誰かの個人的影響という感じではなかったですね。

今西：でも、看護学校事件では谷口善太郎さんなんか講演に来たりしていますから、谷口さんらは学生への影響力はあったのかもしれませんがね。入学された時は宇治校舎ですか。

小畑：宇治分校には行っていないんですよ。新制の1回生は宇治に行ったんですけれども。ぼくが宇治に行ったのは、1953年に同学会が再建されて、代議員選挙の選挙演説に行ったときだけです。

四 京大天皇事件

今西：小畑さんは、1951年7月の原爆展の後、11月10日に京都市警に逮捕されて、11月12日の天皇事件の時は留置場に入っていたわけですか。

小畑：天皇が来た日は雨が降っていてね。警備に出ていた警官がずぶぬれになって帰ってきて、ごくろうさんだなあ、と思って見ていました。こんなものしいことをして、何か起こったら大変だと思っていたら、まさかそんな事件が起こっているなんて知らなかったですよ。拘置所に身柄を移されて、素っ裸にされて尻のほくろまで調べられましたけれども、その後私だけ一人残されたんですよ。なぜかと訊いたら、いまは拘置所も住宅難で整理中だから、と言うのです。すでに独房に入っている者もありましたが、私らのことを完全に一人にするために、部屋を整理していたようです。看守からは、あなたのことは新聞で知っていますから、何かあったら言ってください、と言われました。何故知っているのか、そのときはわかりませんでした。拘置所にはロシア語の小説と辞書を持ち込んでいました。筆記具は所長の許可がいりますから、所長に面会を申し込んだら、大阪におられた小畑さんの息子さんですか、とびっくりしているんです。その人は、住吉の駅前にあった旅館の息子だったのです。所長は、身元もはっきりしているのだから、早く釈放

してやってくれと検察に、何度か申し入れしてくれたいです。救援委員会から聞いて後で知ったのですが。そのことで翌 1952 年、権力と取引をしたのではないかと疑いをかけられました。

今西：あの頃は、そういうことが厳しかったですからね。すぐにスパイだと言われますから。

小畑：そうしたら、^{おおき}鴨沂高校（京都府立）の生徒会長をしていた山崎正和が力になると言ってくれましてね。

今西：あの人は、高校生の時から共産党の活動をしていたんですね。

小畑：鴨沂高校は新制高校のなかで全学連に加盟している唯一の高校でしたから。彼は文芸部だったのですが、鴨沂高校の文芸部は『年輪』という雑誌を山科の刑務所から活版印刷で出していました。山崎は、私の下宿に入り浸っていましたから、私が身体を壊したときなどは、代わりに手紙を書いてくれたりもしました。

1952 年の夏、京大にガサ入れがあつて、火炎ビンが出てきたということがありました。このときぼくは、これはちょっとおかしい、と主張しました。このことも、スパイと疑われるひとつの根拠になりました。

今西：天皇事件の話に戻りますが、中岡哲郎さん（技術史家）が持ってきた公開質問状に「天皇裕仁殿」と小畑さんが書かれたわけですか。

小畑：中岡さんの原稿を見たら、宛名が無いんですよ。それで書こうと思ったのですが、はてな、名字は？、と考えて、そういえば日本に一人だけ名字が無い人がおつたと気がついて、「天皇裕仁殿」と字を入れたわけです。

今西：留置場において直接事件は見ておられなかったでしょうけど、あの事件を同学会や共産党は意識的に起こす予定でいたのですか。

小畑：いやいや。同学会の方針としては、歓迎もしなければ拒否もしない、ありのままの京大を見てもらおう、ということでした。天皇の通るところだけはきれいにして、後はそのままでもいいのか、と。天皇は生物学者ですから、理学部の学生と懇談をしてもらったり、後はついでに原爆展も見てもらおう、こういうことを提起したわけです。共産党の方も、いろいろ議論はあったよ

うですが、軽拳妄動はしないという決定に最終的にはなりました。L（文学部）班と吉田分校にはいちばん過激な跳ね上がりものが多かったのですが、その軽拳妄動するなという決定がL班には届いていなかったようです。ですから、何も知らない文学部の連中だけがプラカードをかついで出ていったわけです。

今西：小松左京（実、作家）は、当時国際派にいましたよね。

小畑：小松左京なんか、天皇事件の頃はわれわれとはまったく一緒にやってはいませんでした。高橋和巳（作家、中国文学者）も一時期入党したんです。

今西：小松左京さんは、木の上から現場を見ていたと回想していますよね。

小畑：後になって新聞で、自分がコーラス（反戦歌「平和を守れ」）を指導したんだなんて書いていますけれども、あれはぜんぜん違う。

今西：そうすると、あの事件は文学部の学生の自然発生的な動きが先導したのですか。

小畑：そうですね。歌ぐらひは歌おうと決めていたらしいですけどね。しかし、同学会としては、歓迎もしなければ拒否もしない、ただ公開質問状だけを提出しよう、と。これは、私は武田君とともに同学会の実質的責任者でしたから。

今西：ただ、その後の騒ぎ方が異常ですよ、マスコミも含めて。学生も処分もされましたよね。小畑さんも無期停学ですか。

小畑：結局、8人が処分されましたが、現場にいた者はそのなかにはほとんどいないんです。内山君は下宿で寝ていたし、武田君は逮捕状が出ていて地下にもぐってしまっているし、青木宏君（当時京大同学会委員長）も昼過ぎに行ってみたら、騒ぎが起こっていたので制止にまわった側です。

今西：小畑さんがいちばんひどいですよ、拘留所に入っていたのに無期停学なんですから。

小畑：これはもう傑作な話でね。看守が独房に捜検と称してときどき検査に来ます。検査の帰りがけに看守が、「同学会は解散になりましたよ」と言うのです。「え!？」と訊いたら、学生も処分された。「そのなかにワシは入って

いるか」と尋ねたら、新聞に一人は獄中で一人は逃亡中と書いてある、これはアンタのことだろう、と。それで処分されたことがわかった。その後検事調べのときに、「ワシ処分になったらしいな」、「なんで知ってんねん」、「風の便りでわかった。ワシは何の処分や」と訊いたら、検事はちょっと口ごもって、「無期停学や」。後でわかったのですが、その看守は立命館の二部の学生だったんです。そういう人間が何人かおりました。

今西：むちゃくちゃな処分ですが、そういうことを大学はよくやりますよね。

小畑：ほんとうに形式的な処分だね。法務委員会の議事録などを見てみるとわかるのですが、なんとか公安条例違反にしようという目論見だったようです。そして、これを機会に大学構内に警官を自由に出入りさせよう、としたのです。国会の委員会で京大天皇事件をとりあげた時のことを、インターネットで調べてみたら、私の名前が出てきてね、びっくりしました。小畑を逮捕したことが事件の引き金になったと思う、と京都市警本部長が発言しているんです。

今西：小畑さんを逮捕することによって、学生たちを挑発して、そういう事件を起こすようにしたという見方もできるわけですね。

小畑：現場の写真を見せてもらいましたが、天皇とはまったく関係のない、「小畑君の無罪釈放を」というプラカードが出ていました。

今西：青木さんは国会に呼ばれていますよね。

小畑：青木君も国会に行ったし、服部さん（峻治郎、当時京大大学長）は何回も呼ばれています。正式の委員会と委員会のあいだの休憩時間にも、よってたかってお前の判断ミスだ、なぜ警官をもっと早く入れなかったのか、と服部さんは責められていました。潮田さん（江次、当時慶応大学塾長）と落合さん（太郎、当時奈良女子大学学長）も国会に呼ばれましたが、ふたりとも、大学内に警官が自由に立ち入ることについては問題がある、と発言しています。

1951年の国会議事録を調べてみると、事件のことが最初に出てくるのは、事件の翌日に議院運営委員会が開かれて、本日の国会で文部大臣が京大で起

こった事件について説明する旨が書いてあります。議論のほとんどは文教委員会ではなく、法務委員会でおこなわれました。警官の早期導入が争点でした。驚くのは、11月中は相当騒いでいたのに、12月になるとそれがぱたっとおさまるんです。新聞にも11月は、学生の追加逮捕や学生課長の辞任といった報道が出ますが、12月になるとやはり消えてしまう。議事録で最後に出てくるのは翌年3月の破防法制定を前にした時期のことで、共産党の田代文久議員が京大事件の顛末について質問して、事件として立件はできなかったという答弁があった時で終わりです。11月の議事録だけを見ると異様な盛り上がり方ですが、終わり方もまた異様です。ぱたっと消えますから。11月を過ぎると、工学部の予算関連の話など事件とは無関係なことばかりで、1952年2月に東大ポポロ事件が起こると、関心はそちらに移っていきます。

今西：高橋和巳さんたちが京大総長室前でハンストをやったのは天皇事件の時ですか。

小畑：あれは、52年の破防法反対闘争の時です。このときに同志社の女子学生が逮捕された。私もよく知っている人です。私は京大で文学サークルの活動もしていたので、彼女の家でやっていたサークルにも援助に行っていました。それがきっかけです。この時私は、身体を壊して熊本に帰っていました。

今西：高橋さんの小説を読むと、天皇事件とハンストの話がごちゃまぜに書かれていますね。

小畑：明るる年の話です。ハンストの時、私は熊本に帰っていてその場にはいませんでしたが、京都に戻ったら、破防法も可決された後で、何もかも終わったという感じでした。

今西：天皇事件の後、かなりたくさんのお手紙が来て、学園新聞などにも載っていますよね。

小畑：京大の文書館に保管されています。

今西：中塚明さん（日本近代史家）が所蔵されていたものを、文書館で見せてもらいました。「お前らは非国民だ」などと書いてありますね。

小畑：激励の手紙もけっこうありました。オーストラリアや中国からも届き

ました。

今西：野間宏さんの激励の手紙も読んできました。

小畑：野間宏とは、彼が『真空地帯』（1952年）を出した後、講演の依頼をしに家まで行きまして、それ以来ずっと付き合いがありました。

今西：戦争が終わってそれほど経っていないわけですから、当時の天皇観には異質なものがたくさんあって、みんなが天皇を歓迎したわけではないはず。このあたりのことはきちんと分析しようと思っています。

小畑：私が天皇来学に際して書いた「ひとつの石の物語」という詩⁽¹⁾は、実際に熊本で聞いた話をもとにして書いています。そういう経験をした兵隊がいたわけです。

今西：こういうことはきちんと紹介する必要があるだろうと思っています。

五 1950年代の京大学生運動

今西：1952年にはサンフランシスコ講和条約が発効されますが、このとき単独講和か全面講和かという問題は、関西では大きな運動にはならなかったのですか。

小畑：天皇事件の直前に私が逮捕されたのは、単独講和に反対する集会で演説をしたのがきっかけになったのです。水谷長三郎（社会党衆議院議員）という卑劣なやつがいると、演説では名前が出さなかったのだけれども、それが引き金になってデモ隊が水谷宅に投石しに行ったんです。水谷の家など私は知らなかったし、検事の取調べでも、何も知らないと突っぱねました。

今西：52年は血のメーデー事件もありましたね。

小畑：京都でもだいふ荒れました。烏丸丸太町の同志社のところに交番があります。そこで警官が学生を制止にかかった。学生が旗竿で警官の尻をひっぱたいたりして、かなり荒れて、円山公園で解散しました。解散した後に、デモ隊のなかにスパイが入っていたというので警官ともめて、私も片方だけ手錠をかけられましたが、そばにあったムシロで顔を隠して、右手を下に身体を横たえて、手錠をかけられた左手で頭を割られないようにかばいました。

警官は頭を狙うんですよ。頭を割られると反抗できなくなりますから。それを知っていますから、ケンカは昔からよくやっていたのでね、頭をかばいながら、軍隊から持ち帰った底に金がいくつも打ってある編上靴で警官を蹴飛ばして、手錠をはめたまま逃げたんです。民医連（全日本民主医療機関連合会）の宣伝カーに飛び込んで、包帯で手錠を隠してもらいました。

今西：52年の全学連第5回大会の時、立命館で国際派と所感派の対立でリンチ査問事件がありますが、この大会には参加されていなかったのですか。

小畑：参加していません。

今西：玉井仁さんが委員長に代わって、国際派が地下室で殴られてケガをするわけです。若い頃の廣松渉さん（哲学者）もこの事件にあって、その後遺症で、死ぬまで京都には行かなかったんですよ。この事件のことはぜんぜんご存知なかったのですか。

小畑：ぜんぜん知りませんでしたね。ただ、52年の末までは武力闘争があって、7月15日の創立記念で闘争をやるということで、主婦が醤油や油の瓶を持っているだけで、警察が中身を検査するという厳しい状況にありました。熊本で1カ月半静養して京都に戻ってみると、そういう雰囲気は充満していました。ちょっとこれはおかしいなと思っていたところ、おまえはデモに参加しなくてよいから、女子学生ふたりとタクシーで松ヶ崎に行け、と言われたのです。行くとき男が荷物持って待っていました。その荷物を運転手がトランクに入れるのを手伝ってくれたんです。包んでありますが、中身が竹槍だというのはすぐわかりますから、これはいかんということで、私はタクシーに乗らず歩いて下宿に帰りました。翌日の新聞には、タクシーの運転手が竹槍を降ろしたと届け出たという記事が載っていました。どう考えてもこの状況は問題があるのではと思うようになりました。

今西：山村工作隊には行かれなかったのですか。

小畑：私は行かなかった。それは熊本での経験があったからです。甘っちょろい気持ちで行っては、絶対に挫折すると思っていました。ですから私は表舞台で踊っていた方で、当時の京大共産党の裏の方にはほとんど関わりませ

んでした。むしろ、関われられなかったのかもしれませんが。

今西：Yという軍事組織があったようですね。

小畑：士官学校にいた人間にYに入れと言われたことはあります。警察予備隊の演習を偵察してこい、というわけです。それはやらなかったのですが、今度はキャバレーにいる米兵に“Go home”と書かれたビラを配ってこいと言われて、2～3枚配ったところでMPが飛んできたのであわてて逃げて帰りました。それっきりYからは離れました。

今西：その頃、まわりでは山村工作隊に行った人もいますよね。

小畑：たくさんいますよ。天皇事件の時、青木委員長はもう降りることになっていて、武田君が委員長代行、ぼくが総務部中央委員代行になって、改選のための代議員会を招集しても人が集まらないんですよ。大学にいなかったんですよ。

今西：みんな山村工作隊や地下活動に行っていたんですね。

小畑：青木君は、あのとき委員長を辞めていけば、京大の教授になっていたと思います。特研生で上に行くことが決まっていたから。彼の人生はまったく変わってしまいました。

今西：青木さんはその後どうされたんですか。

小畑：証券マンになりました。経済学をやっていましたから。

今西：山村工作隊はどのあたりに行っていたのですか。

小畑：丹波ですね。ぼくは、中国の人民解放戦線のまねをして解放区を作るなんていっても、日本のように交通機関が発達しているところでは軍事的にも間違っていると思っていました。在洛党員会議という、京都に残っている京大の党員が集まった席上で、いまの方針は間違っていると発言しました。革命は平和的手段では達成されないという提起があって、それは違う、いちばん大切なのは統一戦線をつくることだとぼくは主張して、大激論になりました。

今西：毛沢東も、「革命は銃から生まれる」と言っていましたし、京大は所感派が多かったですから、思想も激しかったんですね。

小畑：そうです。ぼくはそれに対してはおかしいと思っていました。ただし、組織のなかではそういう発言をしていましたけれども、外に向かつては決して言わない。これは50年の時の経験からです。

今西：北京学校や中国へ亡命した人は、京大にはいなかったのですか。

小畑：京大ではいなかったと思いますね。中国に行った人では、東大の福井駿平君と後に大阪で付き合いを持つようになりましたけれども。

今西：東大の武井（昭夫）グループから全学連の主導権を京大でとれ、という指令は党から来ていたわけですよ。

小畑：ええ、それで玉井君が委員長になりました。ただ、玉井君は実際の権力はあまり持っていないくて、武井君のように演説も上手ではありませんでした。

今西：武井さんをはじめ東大の人はやはり百戦錬磨ですね、頭の回転も速いですし。

小畑：関西学連での大会だったと思いますが、全学連中央の東大から来た人間が、その問題はスターリン全集の何巻何ページに書いてある、なんてやるわけですよ。家に帰って調べてみると、その通り書いてあって、驚きましたね。伴剛次です。彼は大阪時代の幼馴染でした。浪高から東大に行ったと記憶していますが、戦争中に会った時には、日本は負ける、と言っていました。スターリン全集などは全部覚えているんですよ。

今西：そういう秀才が東大にはいますね。52年の警察のガサ入れで、京大で火炎ビンが見つかった時も、武装路線を批判されたんですよ。

小畑：私は武装闘争にはほとんど関わっていないくて、それで逮捕された人間の救援活動という後方支援が主でした。

今西：東大は一・九会などをつくって、かつての活動を総括していますが、京大の人間はあまりやりませんね。

小畑：京大で中心的にやっていた人間は、個人的な問題などから、後になって四分五裂してしまうんですよ。たとえば、1953年の同学会再建の中心的役割を担った米田豊昭は、全学連委員長にもなって53年11月の学園復興会議

を主催するんですが、その後経済的な問題でみんなに迷惑をかけたりしたんですよ。

今西：学園復興会議のときには、わだつみの像が立命館に置かれることになり、歓迎に出かけた京大の学生が橋から警官に突き落とされて、学生と警官隊が衝突するという荒神橋事件も起こりますよね。文学部の学生だった松浦玲さん（歴史家）は代表的な活動家だったのですが、放学処分を受けていますね。

小畑：53年6月に同学会を再建して、代議員選挙がおこなわれました。この時の選挙は新しい規程に基づいて選挙区を、学部区と全学区というように参議院と同じシステムにしました。私と松浦は全学区から立候補したのです。演説で私が話したのは、再軍備反対、徴兵制復活反対、これだけでした。学生選挙権の問題とあわせて、このふたつが53年当時の学生の最大の関心事でしたから。当選して、関西学連の委員長にも選出されました。米田君が全学連の委員長で、大島渚（映画監督）が京都府学連委員長になりました。

今西：大島渚さんはダンディというか、ええかっこしいだったらしいですね。

小畑：大島渚とは後々もいろいろ関わりがあってね。創造座の合評会の司会をしたり、企画の相談などをしていたものですから、よく知っています。学園復興会議で彼が議長をしていたとき、例の調子でキレたものだから、議長不信任案を出されたんです。彼を呼び出して説得してね、どうにかおさまりましたが、大変でしたよ。

今西：短気ですね。

小畑：すぐキレる。テレビでキレているのを見て、変わらないなと後で思いました。

六 文学部の活動家たち

今西：大島さんは法学部ですが、ほかの学部ではどういう方とお付き合いがあったんですか。

小畑：あんた本当は何学部や、とよく言われていました。

今西：小畑さん自身は文学部の国文学学科ですよ。

小畑：ぼくがいたために、京大にロシア文学科があったと思っている人もいるようです。国文学科を卒業した人間の話では、小畑は不思議な存在で、めったに授業には出てこないけれども、教官にロシア語を教えていたとか、そういう噂もあったようです。高等学校の時からロシア語をやっていたので、結核研究所の人間などから頼まれて、ソビエトの文献を翻訳したりしていましたから。ロシア語の授業は、初級は出ずに、吉田分校の研究室であった中級には出て、プーシキンなんかを読みました。先生とはひとつしか歳が違わなかったこともあって、お客さんの相手をしたり、先生がいないときは代わりに授業をしたりもしていました。単位は取っていませんでしたが。卒業論文は二葉亭四迷とゴンチャロフの小説でした。

今西：ソビエト研究会のようなものは京大にありましたか。

小畑：京大にはソ研があって、最後の方で私は事務局長をしていました。日ソ親善協会ができて、理事にもなりました。高校教師になる前は、立命館の広小路校舎の教室を借りて、ロシア語の講習会もやりました。

今西：ほかにロシア問題をやっていた人、たとえばロシア経済思想史の田中真晴さん（のち京大教授）などは来ておられましたか。田中雄三さん（のち龍谷大学教授）などは……。

小畑：田中真晴君は来ていなかったと思います。彼は木原（正雄、経済学者）ゼミでした⁽²⁾。木原先生には私もお世話になりました。田中雄三君は、何回か顔を出していました。

今西：高橋哲郎さん（のち福井大学教授、理科教育）の回想などを読んでみると、文学部では戸田芳実さん（日本中世史家）などが活発に活動されていたようですね。

小畑：原爆展の頃、戸田君は宇治分校にいました。原爆展の詩を書いて、京大反戦平和詩グループの推薦で、『日本学生詩集』（青木書店）に載りました。『日本学生詩集』は、後に大阪府会議員になった東大の諸田達男君らと私が編集をして、野間宏が選者の代表になって出したものです。

今西：戸田さんと松浦玲さん（思想家）が代表的な活動家だったようですが、江口圭一さん（日本近現代史家）などは、どうだったんですか。

小畑：江口圭一はその頃宇治分校にいて、天皇事件について批判的な投書をしました。

今西：学園新聞にも出ましたね。

小畑：後になって、あの批判は自分の判断ミスだったと書いていますが。江口君とはその後はあまり付き合いがありませんでした。名前だけはよく知っていましたけれども。

今西：ほかの日本史の人とはあまり付き合いがありませんでしたか。

小畑：中塚明君はよく知っていましたが、原爆展の時、彼は「前進座事件」（1950年）で停学中でした。京大に入ってびっくりしたのは、被処分者や被告というのがまわりにいっぱいいるんですよ。

今西：荒神橋事件で放学になった松浦さんや、第2次滝川事件で無期停学になった芝原拓自さん（日本近代史家）など、いっぱいいますよね。

小畑：芝原拓自や鈴木良（日本近代史家）などに言わせると、自分たちをこんな風にしたのは小畑の演説だった、と。京大同学会の選挙で共産党代表として宇治分校に演説に行きましたが、それを聞いたのがきっかけだったと言うわけです。どこまで本当だかわかりませんが。古い書類を整理していたら、『われらが未来のために』という、1953年の宇治分校自治会の文書が出てきました。京大生協でつくったガリ版刷りの。

今西：いまは京大の文書館に入っていますね。

小畑：私が寄贈したんです。誰が書いたのか分からなかったのですが、のちに大阪の桃山学院高校の教師になって、京大国史学科の三羽ガラスの一人と呼ばれた早崎という男がおりましたね。

今西：三羽ガラスというのは誰なのですか。

小畑：早崎、芝原、鈴木良。中塚君や河音能平君（日本中世史家）も含めて、国史はわりと活動家がありました。国文はあまり多くはなかったと思います。国文学科の主任教授の遠藤嘉基先生（国語学者）が五高の先輩で、そのおか

げでだいふ助かりました。アルバイトを探してくれるなど経済的にも助けてもらいましたし、身元保証人にもなってもらいました。

七 荒神橋事件以後

今西：荒神橋事件の時は現場におられたのですか。

小畑：学園復興会議の前からずっと徹夜続きで、事件は会議の最終日でした。私は疲れきっていたので、下宿で休んでから、手紙を出そうと京大正門のポストに出かけてきたところで、事件が起こったことを聞きました。すぐに現場へ飛んで行きました。その日は、立命館を会場にして閉会総会をやることになっていました。学園復興の歌というのを実行委員会で募集していて、私が書いた詩が入選したんです。総会で歌を発表するというので、私も作詞者としてあいさつをすることになっていました。そこで私は、作詞者としてではなく関西学連の委員長としてみなさんに訴える、市警に抗議に行こう、と呼びかけたのです。

今西：このとき過労で倒れられて、関西学連委員長をお辞めになるわけですね。

小畑：現場に行って、負傷した学生を病院に送る手配をした後です。平沢君という、党員ではなかったのですが、親しくしていた英文科の学生がいました。彼の家は西陣で酒屋さんをやっていて、彼の家までどうにかたどりついて、今晚はあぶないから下宿に帰らない方がよいと言われて、一晩泊まって、次の日やっと下宿まで帰りつきました。とても動ける状態ではなかったですね。それで委員長を降りたんです。

今西：松浦さんは処分された後、裁判をやっていますよね。その支援運動はやられたのですか。

小畑：いや、その頃は、身体を休めることに専念していました。松浦君が処分されて、その後処分反対闘争が続きます。その闘争の最後の方は、私は現場にいなかったんです。

今西：松浦さんの話だと、裁判を延々とやっていると復学できなくなる人が

でる、ということで、裁判はやめて立命館に移ったということですよ。本当に残酷ですよ、放學処分というのは。

小畑：そこが東大と違うところなんです。放學と退學とではぜんぜん違う。東大は退學させても戻しているんですよ。ところが京大は完全に追放してしまうわけです。

今西：しかも松浦さんの場合、ほかの国立大学も受けてはいけなかったんですよ。だから立命館に行くしかなかったわけですよ。

小畑：1949年の病院事件（看護学校）にも関係していた松岡健一というのがおります。玉井君を東京に送り出した張本人です。彼は、「前進座事件」の追加処分で、医学部を卒業直前だったのに放學になったんですよ。それで共産党の専従職員になり、玉井君を東京に行かせたのです。その後、自分の進路は自分で決めたらよいということになって、彼の家は江戸時代から岡山で代々医者の家柄でしたから、やはり医者になろうと決めたのですが、京大には戻れないので、岡山大学の医学部に入りなおして、岡山で病院をやっています。

今西：「前進座事件」で放學になった水口春喜さん（同学会委員長）のように、京大を辞めて共産党の専従職員になるという人は、けっこういたようですね。やはり処分が厳しかったのです。ところで、演劇活動もやっておられたのですか。

小畑：「風波」という劇団がありまして、魯迅など中国の芝居をやっていました。それとの関わりもあって、「京都演劇研究所」を立ち上げました。このなかの一人だった戸浦六宏（東良睦宏）は、東京に行っていた大島渚に引き抜かれました。研究所の中心になっていた芦田鉄男君と戸浦は女性関係でいろいろあってね。ぼくも一枚噛んだかたちになったのだけれども。

今西：小畑さんは、高橋和巳さんと小松左京さんが揉めたのにも関係されているのですよね。

小畑：高橋和巳たちが文学集団をつくって、『対話』という同人雑誌をはじめます。小松が編集長で、私に何か書けというので、「京都・一九五二年夏」を

「あかしごろう」のペンネームで書きました。少し長いから削ってくれと小松に言われて削ったものが、第4号に載ったんです。そうしたら高橋が、これは小説ではない、と怒って『対話』を脱退するわけです。

今西：高橋さんが『憂鬱なる党派』（1965年）を書く時も、小松さんはだいぶ反対されたそうですね。あまりにも早すぎると。高橋さんのハンストの時のことで何か覚えておられることはありますか。

小畑：中国語中国文学科に豊田善次（『高橋和巳の回想』の著者）というのがありました。彼が文学部の学友会委員長をしていたと思います。高橋とは非常に親しかったのですが、豊田が破防法反対闘争で処分されて、それに抗議して、高橋は友情からハンストに出たのです。

今西：あの時に高橋さんと一緒にハンストをしたのは、中川久定さん（フランス文学者）と一海知義さん（中国文学者）ですね。この頃の京大の事件はいくつか小説にもなっていますが、あまり総括はされていませんね。

小畑：みんないろいろ立場が分かれますから。

今西：山崎正和さん、小松左京さん、高橋和巳さん、作家になった人たちもみんなばらばらですからね。

小畑：小松左京は、作家として売り出す前に私に電話をかけてきたことがあります。小松の家は鉄屋をやっていたのですが、石油のパイプをソ連に売り込むのにあいだに入ってくれないかと頼んできたんです。民間放送がはじまったときに、いとしこいしがニュースをネタに漫才をやっていたのですが、小松がその台本を書いていたんです。それでわからないことがあると、やはり私のところに電話をかけてきました。『日本アパッチ族』（1964年）を書く頃までは、わりと付き合いがありました。これを書いた時に小松が、事実あれは日本の革命だったのだが、天皇のことはまったく書いていない、この問題はどうするのだと出版社から言われた、という話を聞いたのが、小松とまともに話した最後だったと思います。高橋和巳が『悲の器』（1962年）を書いて文藝賞を受賞したお祝いにみんなで飲んで、京都中を走り回って、最後にたどりついたところに多田道太郎さん（フランス文学者）がいたのは覚えて

いる。

今西：多田さんと高橋さんは、「日本小説を読む会」の仲間ですね。開高健さん（作家）のグループとは付き合いはなかったのですか。

小畑：ありませんでしたね。

今西：その後は、ずっと高校ですか。

小畑：ひたすら教師です。教師をやるつもりはさらさら無かったんですけども。せざるをえなくなりましてね。

今西：京大の野間光辰先生（日本近世文学者）の御推薦だったのですか。

小畑：淀川女子高校（現英真学園高校）の理事長が江口証券の江口治郎といって、この人は京大経済学部の出身で、旧制甲南高校で野間さんと同級生でした。それで野間さんのところに照会がいったんです。野間さんが困って遠藤先生のところに相談にいったら、小畑のことは自分が保証すると言ってくださって、その旨を書いたものを送ってもらって、採用されました。後で、私が組合をつくった時に、興信所を使って、組合の役員を調べたそうです。そうしたら、私だけいろいろ問題が出てきて、江口さんが京大まで文句を言いに来た、と遠藤先生が後でおっしゃっていました。

今西：それでは、今日は長い時間どうも貴重なお話をありがとうございました。

注

(1) 京大文学サークルの『花の環』復刊第1号（1952年）には、「天皇事件一週年記念特集」として、あかしごろう名で、「一つの石のものがたり」と「その日その時」という二つの作品が載せられている。後者は、中立売署での留置と、検察の取り調べの体験を描いたものである。

前者は、中国大陸にいた「中村一等兵」のもとに、貧しい少年からの「慰問袋」が送られてくる。その中には、「宮城前」からもってきた石が入っており、「どうかこの石を 天皇陛下と 思って だいじにして下さい」と書かれており、中村は中隊長の命令で、この石を持って中国大陸を従軍する。しかし、敗戦になり、「天皇も人間であると 公然と語られはじめたとき」、この石は「大陸の草原にすてられ」る。天皇制も、この石と同じような一つの「虚像」にしかすぎないことが、

美事に形象化された詩である。

- (2) 田中真晴氏は、出口勇蔵ゼミの所属であった。